

# 未 来 と 過 去

——『ロード・ジム』における想像力と記憶——

押 本 年 眞

## 序

人間には、この世に生まれたその日より、その人なりの明日があり昨日がある。明日は連なって未来として前にあり、昨日は過去となって後に残る。個々人によってどれほど意識的でありうるかは異なるとしても、未来に対しては夢や希望を持ち、また過去を振り返る時に、自ら省みて充実した納得のできるものであってほしいと願う。しかし、多くの場合、実際に生きた人生は望んでいたものとは違い、過去を振り返る時に、なすべきであったこととなしえたことの間には落差を痛感する。『ロード・ジム』(Lord Jim)は、このような想いをあらためて感じさせる小説である。

かくありたいと望んでいた人生と、実際に生きた人生に差が生じるのは、明日と昨日の間には、生きるべき今日があるからである。ひとりひとりにとって、今日是对処すべき様々の事態をもたらし、胸中ひそかに抱いていた空想とは異なる現実が眼前に出現する。『ロード・ジム』のジムの場合、自らの未来像を空想する、夢見がちな傾向がとりわけ強かった。まず、彼の夢の特質から考察してみよう。

## I

ジムの夢は、まだ生家の牧師館に住んでいた少年時代に読んだ休暇むきの娯楽読物に描かれていた海上生活によってふくらんだ。「思考の冒険心に満

ちた自由」が生み出す、未来の夢の中の自画像は勇敢な行為に満ちた日々をおくり、「本の中の英雄のようにひるむことなく」、「常に職務に献身する模範」であった。<sup>1</sup>子供らしい未来の空想ではあるが、この夢の特質は、ただそれだけにはとどまらない、『ロード・ジム』全体を理解する鍵を含んでいる。ロス (Daniel W. Ross) は、パトナ号事件以前にジムが持っていた自己の未来についてのイリュージョンは、自己中心的 (ナーススティック) であるという。<sup>2</sup>しかし、実は事件の後も、この特質は表れ方を多少変えてジムの生き方を貫いていて、しばしば、彼の一眼、長所にみえる点と結びついているために、『ロード・ジム』を魅力ある小説にする反面、単純な解釈を許さない要素である。

ジムは終始、頑固なまでに他の人々より立派に振舞いたいと望み、努力型の生き方をする。彼はコンウェイの船員訓練所を立派に終了し、若くして一等航海士の資格を得、パトナ号事件の起こる直前までは、職業的技術・知識に精通し、その育ちもあってか「紳士らしい」風采をした、前途は有望な高級船員であった。かくして、ジムはさして試練に会うこともなく、順調な日々が続く限り、現実でも空想でも、常にその場の中心人物としての自己の像を保持し続けることも可能であった。

しかし、自己中心的な夢が描き出す未来は、この世にまれにしかあらわれない状態を常時あるように想像し、反面、当然考慮に入れるべき要素を含まない。たとえば、実際の船員生活には、少年時代の夢のように、冒険がしばしばあるわけではなく、「空と水との間の存在の魔法にかかったような単調さ」を噛みしめる日々をおくることになる。この段階で、コンラッドは無名の語り手をとうして、勤勉で努力型にみえるジムの仕事観には欠けた点があることを、パンを得るための日々の仕事の「唯一の報いは仕事に対する完全な愛にある。その報いはジムから逃れていた」(10頁)との表現でほのめかしている。仕事とは、それぞれの人間が中心になって常に華麗に活躍することを許しはしない。

ジムの仕事観との関連で、パトナ号事件を考察してみよう。八百名もの乗客を残したまま衝動的に船を見捨てるという船員としてもっとも恥じるべき罪をジムはなぜ犯したのか。ジムには、船員が守るべき掟 (code) との関係で、根本的な問題があったことをベアトラー (Jacques Berthoud) は次のように鋭く指摘している。

The reason is that he regards the code not as something to be obeyed, but as something to be used. His concern is not with what it demands—steadiness in the face of danger—but with what it sometimes provides—glory at danger overcome. In effect, this means he does not take danger seriously enough. A man whose profession regularly exposes him to danger will prepare himself against it by doing all he can to reduce the risk. Far from trying to keep it at bay, however, Jim actually invites the idea of it, and in imagination regularly rehearses feats of audacity and daring.<sup>9</sup>

何ものにも束縛されない時の想像は、自己愛に基づく都合のよい未来の自画像を描き出す。そこには、この世には確かに存在するが邪魔になりそうな二つの要素は含まれていない。そのひとつは、思いがけないこと、驚くべきことである。コンウェイの訓練所時代の冬の嵐の日に、避難してきた沿岸航行船が係留中のスクーターと衝突し河面に投げ出された人々を他の訓練生が救助した際に、カッターに乗り込むのが一瞬遅れたためにジムはその救難の手柄に加われなかったのだが、彼はそのことを次のようにしか受けとめない。「彼は大地と空の荒々しい大騒ぎが彼の不意をつき、危うい事態に進んで対応しようとしていたのを不当にもおさえつけられたことに怒っていた」(9頁)(下線は筆者)

実際には、ある意味では強すぎる彼の感受性と想像力が嵐の中に、自然の狂暴な意志を見たように思わせたために、他の訓練生のように即応できなかったにすぎない。ジムは救助に加わった訓練生が興奮して手柄話をしている

のを、つまらない自慢だと見下すよりも、この経験からもっと学ぶべきだったろう。コンウェイの冬の嵐の日に、救助用のボートに跳び降りるのがわずかに遅すぎたジムは、結局は沈まなかったバトナ号から、早く跳び降りてしまう。この衝動的行動が彼の人生を変え、最後まで忘れることができないものとなる。しかし、マラバー・ハウスで夕食を共にし、じっくりとジムの話に耳を傾けていたマーローは、ふと、ジムは罪のある行動を犯した事実から巧妙に逃れようとしているのに気づく。ジムは言う。「全ては心構えができています。僕はできていませんでした。その時には」(81頁)。またもや、彼のとらえ方では、不意を襲われたことになる。

人間は十分に予想したことには驚きはしない。ジムが、驚くべきことに不意を襲われたように二つの経験をとらえるのは、彼の想像力が描く自己の未来像には不十分な甘さがあったことになる。この世には、一個人の願望や夢にはしばしば含まれていない、さまざまな要素が存在する。そのひとつには、目をそむけたくなるような嫌なものがある。

円材の倒れる事故により、東洋の港町の病院で療養した後、ジムが少し安易な勤務条件を望む気持ちによって乗り込んだバトナ号の船長は、「あらゆる下劣で卑劣なものの化身」であった。事実のレベルでは、ジムはこの船長と同じ恥じるべき、責められるべき行為をしてしまい、バトナ号上はもとより、狭い救命用ボートにおいても、文字どおり呉越同舟の立場になる。しかし、決定的瞬間以前も以後も、ジムはそのような人物の持つ嫌らしさと自分自身とは無縁であるとみなし、超然とした態度をとる。ジムのこのような態度は、その後、コルネリウスやブラウンに対しても示され、そのことによって、この二人に強い憎しみを燃え立たせる。

海難審判の行われることになった東洋の港町の港湾事務所の前で、マーローは、「犯罪以上の弱さ」、しかも誰も完全には免れることができない、「知られてはいないが、感づかれてはいる弱さ」の中にある人間を見た気がしてぞっとする。しかし、ジムは自身の中にそのような弱さがあることは認めず、

「環境の極悪さ」にもてあそばれたとだけ思い続ける。このために、ジムの真剣な告白を聞いても、マーローは同情や共感も覚えるのだが、人間の自己把握の甘さを許す、「巧妙なごまかし」にも触れる思いがする。

## II

想像力とは、主に未来にかかわるものである。しかし、ある時点から過去を振り返ってみると、想像力がいかなる働きをするかが、一層よく分かる。ジムの話を聞きながら、マーローはつくづく「想像力につかれた奴」だと思う。ジムはこの期に及んでも、パトナ号上で最善を尽くす意図があったことを、マーローからすれば、「ロマン主義的な偉業の不可能な世界」でしかない部分を含んで、延々と述べる。

さて、ジムの想像力は、概して自己中心的で都合なイメージを浮かび上がらせるのだが、パトナ号衝突の際は、実際以上に「想像力によるつくられた恐怖」を感じることであり、有効適切な対応をとれなくさせてしまう。

『ロード・ジム』では、想像力を持つことが、人間にとって好ましいことかどうかが重要な問題となる。同時に、この小説では夢(dream)という言葉が繰り返し用いられている。そして想像力と夢は、ほぼ同義にとって差し支えないようだ。『ロード・ジム』においては、各登場人物の能力、性向はほとんどの場合、想像力(imagination)という言葉との関連で表現される。この想像力の持つプラス、マイナスについては後に考察するが、ジムの自己の未来像には、妄想(delusion)、し意的想定(arbitrary supposition)の要素があり、それは否定されるべき要素であることが、マーローの立場からはっきりと示されている場合がある。

サマランの船員商ディ・ジョングのもとで水上セールスマンをしている頃のジムに久しぶりに会った時、マーローは自分が推薦した職ながら、なんとも単調で怪しい仕事だと感じ、「彼の空想上の誇張された行為への罪——彼が実行できる以上の魅惑を追い求めたことへの罪滅ぼし」(151頁)ととらえ

ている。この場合、空想は fancy という語で表現されている。しかし、『ロード・ジム』において、fancy が使われるのは例外的である。<sup>4</sup>

ジムは、とりわけ想像に耽ける傾向が強い人物とされている。このジムの囲んで、さまざまな点で彼とは対照的な、引立て役になる人物が現れる。ジムと彼らとの関係を、想像力を軸にして整理してみたい。

ビッグ・ブライアリーは、他人に優越感を持ちつつ職務に精励して、尊大な態度で生きても、必ずしも人生の早い段階でジムのようにならば罰せられる結果にはならないことを示唆している。

“He seemed consumedly bored by the honour thrust upon him. He had never in his life made a mistake, never had an accident, never a mishap, never a check in his steady rise, and he seemed to be one of those lucky fellows who know nothing of indecision, much less of self-mistrust.” (57頁)

この引用部分は、ブライアリーがジムとは非常に異なった人間であるという印象を与えるかもしれない。しかし、よく読めば、まさしくこれこそジムが夢みた自己の未来像であったといえよう。すなわち、両者は近似の関係にある。二人の間の差は幸運と不運でしかない。

パトナ号事件の陪席審判員を司法当局より依頼されたことは、ブライアリーにとって、まったく迷惑であった。なぜなら、彼はそれまでは明確な事実の世界のみに生きていた。船主と会社の上層部の信頼を決して裏切らない働きをすることにより、東洋貿易にかかわるもっとも優秀な船の船長としての尊敬と待遇をうけていた。ブライアリーの人生観では、人命救助等の功勞に対し彼に贈られたクロノメーターや銘文のある双眼鏡が象徴するように、この世で果たすべき義務、職務は明確で、能力、努力、功績に対しては、それにふさわしい、くっきりと手触りのある報酬があるはずであった。

海難審判の陪席を勤めたことは、ブライアリーから人生の明確さを奪ってしまった。見たところ、被告席にいるジムは若い同国人で、イギリス商船隊

の伝統が育てあげた立派な高級船員だった。その被告の姿は、裁いているブライアリーの若い頃に重なり合うものがあり、およそ告発されているような行為を犯すことはないはずであった。

しかし、ブライアリーには、幾分かの想像力があつた。このために彼は、審理中に、万一自分自身がそのような立場に置かれたら、と想像した。傍聴席にいたマーローには、ブライアリーの自己満足した様子は「花崗岩の表面のように硬く」、自信に満ちたようだったが、裁判に少々うんざりしたような表情の下で、「おそらく自分自身のケースについて審理をしていた」ブライアリーには、ジムを自らの分身と、認めるだけの想像力はあつた。想像上のケースについての判決は、まぎれもなく有罪であつたに違いない。これはマーローの言うように、「疑いもなく重要な意味をもつこと」であり、ぞっとさせ「そのような考えを持ち続けることに慣れていない人は生きるのが困難だと思う」（59頁）ことであつた。

かくして、ブライアリーは船から跳び降りるという点ではジムの行為と重なる動作によって自殺する。多くの人々が未来に望むような人生を既に生きてきたブライアリーにとって、想像力が示すのは、その輝くばかりの経歴が、いつかきわめて不名誉な形で終わるかもしれない可能性である。これは彼には耐えられないことであつた。何故なら、ブライアリーを優秀な船長たらしめた要因で、同時に彼の弱点でもあつた点は、他人の目に自分がどのように映るかを最大の行動基準としていたことである。清廉潔白とみえるブライアリーが、査問会の途中で、陪席審判員という立場でありながら、マーローに200ルピーを渡して、ジムに裁判より逃亡するようにそそのかすことを依頼するという彼が持つうさんくささはこの弱点によるものである。ブライアリーにとっては、なされてしまった行為自体の当否よりも、他人の目、とりわけ彼が見下している東洋人の目より、まずいことを伏せることができるならば一件落着となるはずであつた。

## III

ジムがボートに飛び降りた前後の事情を話している際に、マーローは、ふと次のように感じる。「ジムは、現実には彼の想像力が創り出した恐怖の半分もひどくも、苦しめるものでも、そっとさせるものでも、執念深いものでもないという、ある無意識の確信をもっていたにちがいない。」(113頁) ジムはいわば想像力に足元をすくわれた。ジムと同質な要素を持ち、わずかな想像力を持っていたビッグ・ブライアリーは自殺した。では、想像力を持たない生き方が妥当なのであろうか。

この問いに対する答となりそうな登場人物が何名かいる。まず、想像力が皆無といってよい人物にチェスターがいる。彼は、ジムが海難審判で有罪の判決を受け、一等航海士の資格を取り消されて、自責の念と恥辱にまみれた失意の表情で法廷より出てくるのを見て次のように言う。

‘You must see things exactly as they are—if you don’t you may just as well give in at once. You will never do anything in this world. Look at me. I made it a practice never to take anything to heart.’ (162頁)

チェスターは、確かに、あるレベルでは目の前の現実をありのままに見る。彼はジムを見て、その体格と一等航海士の資格を奪われた立場を見てとり、即座に自分の計画に利用できる人間だと判断する。

しかし実際には、現実的であることを自負するチェスターが、相棒のロビンソン船長という山師的な老人と組んで実行しようとしているウォルポール環礁のグアノの島の開発計画ほど非現実的なものはない。その計画の楽天的なことに、マーローは啞然とするばかりで、ジムを紹介することは無論断わる。

現実的であると自称するチェスターとロビンソン船長は、亡霊のようなオンボロ船に乗って出かける。しかし、彼らを待っていたのは、太平洋上での



ハリケーンに襲われての死であった。全てのことを実利的な利用価値で判断し、今日の現実を有利に処理しようとするのが、おのずと好ましい未来を到来させるという考え方は、コンラッドの作品では繰り返し否定されるようだ。チェスターとロビンソンに比較的似通った人物として、『闇の奥』の黄金郷探検隊の一行がある。また、パトナ号事件の査問会から逃げた、無責任な巨体の船長と二人の高級船員も、職業倫理や名誉といった観念に悩まない現実派であった。しかし、少なくとも船長に関する限り、その後日談は、大洋での悲惨な死であつたらしい。

想像力を持たないで生きることは、賢明なことではない。しかし、想像力の少ないことが、必ずしもマイナスではなく、むしろ職務を立派に果たさせる例もある。船長をはじめ白人の高級船員が船を見捨ててしまった後も、長時間にわたり蛇行速度のない船の上で持ち場についていたパトナ号の二人のマレー人の操舵員もその一例である。彼らの一人の法廷での証言では、「船になにかまずい事が起こった」と思ったが、「命令が無かったので」、舵輪から離れなかったと言い、「白人が死の恐怖のために船を離れようとしているとは思いつかなかった」（98頁）と述べられている。

この証言は、職務放棄した四人の白人に対する痛烈な皮肉である。とりわけ、「敏速で先手を打つ幻想の能力を持つあわれな奴」であるジムを対比すると、「想像力の欠如と知力の鈍さ——一言で言えば愚かさ——が賞賛すべき振舞いを生み出すこともありうる」<sup>5</sup>ことを示す。

ジムがパトナ号事件の経過をマローに熱っぽく語り続ける場面の脱線として、リトル・ボブ・スタントンの挿話が位置していることについて少し考察してみたい。

船具商の水上セールスマンをしているジムの侘しきとの連想で語られる小男のスタントンは事情があつて一時海上生活をやめ、保険勧誘員として暮らしていたが、その味気なさに耐えかねて船員に戻り、まもなくスペイン沖合いでセフォラ号が沈没した際に、最後に残っていたある婦人の大柄な小

間使いを、航海上の職務に忠実に救助しようとして船もろとも波に吞まれてしまう結果に終わる。この挿話は、想像力の少ない真面目な人物が倫理的行動を意図しても、結果は英雄的どころか、滑稽な悲喜劇の結末をむかえることがありうることを示唆している。この世では、ジムが考えているよりも、意図が立派でも不毛に終わり、倫理的行動を試みても、賞賛にも栄光にも直結しない例が多いことをも、この挿話は暗示している。

パトナ号事件より相当の歳月がたってからマーローがシドニーで偶然に会ったフランス人中尉は、さまざまな点でジムと対照をなす人物である。海上生活を経験し、生きてゆく上で何度も恐怖に身をさらした点で、フランス人中尉はジムと共通している。けれども、ジムの行為への判断では、中尉は非常に厳しい。

フランス人中尉には、想像力は少ない。彼は、「人はできる限りのことをやる」という態度で人生に対処し、フランス軍の砲艦が危険な状態のパトナ号をアデンまで30時間かけて曳航した際にはパトナ号の甲板上で見張り役を無事に果たした。彼は、決してジムのように不可能なまでに英雄的な行為を夢みたりはしない。

マーローがよく見れば、手の甲には銃弾による星型の傷跡、こめかみのあたりにはサーベルで切られたらしい痕のあるこの海軍中尉は、経験した数々の恐性をふまえて、「恐怖、恐怖——それはいつでもここにあるのです……ある状況になれば恐怖は必ず出てきます。いまわしい恐怖が」(146頁)と胸の辺りに手をあてて断言する。しかし、中尉は、人間は本来臆病な者だという。では臆病な人間が、数々の恐怖のある人生を、凡庸な中尉自身がそうであるように大過なくすごす例が多いのは何故か。中尉は次のように理解している。

‘Man is born a coward (*L’homme est né poltron*). It is a difficulty—*parbleu!* It would be too easy otherwise. But habit—habit—necessity—do you see?—the eye of others—*voilà*. One puts up with

it. And then the example of others who are no better than yourself, and yet make good countenance....' (147頁)

他人ができること位は、せめて自分も努力することが中尉の行動指針であった。「結局のところ、人はほかのだれかよりも利口なわけでも、より勇敢なわけでもない」(146頁)と彼は言う。中尉は決してジムのように他人より一段と高い栄光をつかもうと夢想したりはせず、自分を他人と同列に置くことによって大過なく生きてきた。ベアターの表現を借りるなら、中尉は「掟」を「利用するもの」ではなく、「従うもの」ととらえ続けた。そこに彼の強さがある。

だが、中尉の強さは、彼の凡庸さと深く結びついている。マーローは、軍人でありながら、嗅ぎ煙草の好きなフランスの田舎司祭にも似たこの中尉が、「偉大な名声の素となる着実に信頼すべき人々の一人」であることを認めるが、同時に、初老の域に達しながら中尉でしかないこの人物の、鉄灰色をおびた白髪、顔にうかぶ深い疲労、傷跡、汚れた肩章を見ると、一将の功のもとに消え去ってゆく無数の人々の一人であるとの印象をも持ってしまう。

フランス人中尉は、もう何年も前のことながら、バトナ号上にいた30時間の間に用意された食事には、ワインがなかったことを覚えている。ささやかであっても、具体的でたしかに手に入るものこそ、中尉にとっては大切であったことを、このワインへの執着は暗示している。彼は未来について余り期待したり夢想せず、その日その日のワインを繰り返して飲んで、その過去には恥じるべきものはない。この傾向は、彼が漠たる栄光を追い求めはしないが、最小限の守るべき名誉については、きわめて厳格であることと似通っている。その話しぶりから彼自身も、あわや全ての名誉をうしないような経験を何度かしただろうと読者は推測できるが、「ひとつ余計な真実に触れても、生きられなくなる訳ではない。……しかし名誉は本当のもの、現実のものです。……そして、名誉が失われたら、私は何も言うことができません。なぜなら、ムッシュウ、私にはそんな経験はないですから。」と言って「私には微妙す

ぎる」(148頁) ジムの場合には、それ以上、立ち入らずに去ってしまう。

#### IV

マーローはジムに対して次第に深い関わりを持つ。この過程で、次の二つの印象がマーローの心に強く残る。そのひとつは、海難審判所の判決後は、ジムはどこにも行く場所のない人間であることである。もうひとつは、マーローは苦境に陥っているジムにたいして同情、共感を覚えて、いろいろと気にかけては援助するのだが、ジムはマーローにとって最後まで、不可解な謎の要素があり、このためマーローの視点からなされるジムの描写には、「日陰の(身)」(“under a cloud”)という表現が繰り返される。

この二つの印象が、シュタインの忠告、パトサンでのジムの功績と立場、紳士ブラウンの出現とジムの最期にいかにかかわるかを、未来への想像力と過去の記憶という観点から論じてみたい。

海難審判中に、マラバー・ホテルで二人で夜更けまで話したときに、既にマーローはつくづく、まだ二十四才にもなっていないこの若者は「どこにも行く場所のない」(nowherer to go) 立場だと感じる。また、判決がおきた日に、波止場でしょろ然と立ち尽くしているジムを見て、この地球上のどこにも、「引っ込むことのできる場所がない」孤独な人物だと、あらためて感じた。

マーローは、つてをたよって、およそパトナ号事件のことなど伝わりそうもない場所に、ジムの仕事口を何度か斡旋する。しかし、事件にまつわる過去は、噂話、同じく離船した元船員の出現というかたちで、ジムの現在に表れてくる。過去の不名誉な行動の記憶が、繰り返し、ジムの現在の生き方を脅かし、悩ますこととなる。ジムは、十回以上も逃げて新しい生活の場を求めてゆく。その、いわば退却の範囲はエグストロムに言わせると「こんなことをしていると、やがて地球だって十分に広くはないのに気づくだろう」(196頁) ほどで、径三千マイルにもおよんだ。コンラッドの特徴である、あ

る人間の過去は完全には断ち切ることができないという見方が、ここにもうかがわれる。

マーローは、ジムをどう扱うべきか分からなくなり、シュタインに相談に行く。若い時にはバヴァリアの革命運動に加わり、数々の冒険も経験し、今ではヨーロッパではむしろ著名な昆虫学者として知られている学究肌の面もある、信望厚いこの裕福な商人は、マーローよりジムの話を聞くとすぐに、「よく分かったよ。その青年はロマンチックなんだ」(212頁)と分類し、診断する。

この場面は、周辺部はほの暗い、広くて暗い書斎で二人が向き合っていて、医者診察にも似た雰囲気のために、「治療法」という表現がすぐに出てくる。しかし、シュタインが語ることは、人間は、少なくともジムのような人間は、いかなる存在であるかを示してはいるが、実際的な治療法ではない。目だたない表現ではあるが「ただひとつ治療法がある」とシュタインが言った時、彼の長い人差し指は、標本箱のガラスにあたり、その下の蝶の標本——すなわち死骸をさしている。「ただひとつ、我々が我々であることを治すことができる」と彼が言う時、そのただひとつとは、死であるとシュタインは信じている。死という、将来への想像もなければ、自らの生き方についての記憶もなくなる時にのみ、人間は安らげるというのだ。ハムレットの有名な独白をもじりつつ語るシュタインにとって、問題は生か死かではなく、いずれは死に至る人間が、いかに生きるかについて多少の示唆を与えることのみである。

シュタインは、きわめて偶然に見つけた自慢の美しい蝶の標本を指さして、人間の存在がいかに厄介なものであるか述べる。

“‘We want in so many different ways to be,’ he began again.  
‘This magnificent butterfly finds a little heap of dirt and sits still on it; but man he will never on his heap of mud keep still. He want to be so, and again he want to be so...’ He moved his hand

up, then down... 'He wants to be a saint, and he wants to be a devil—and every time he shuts his eyes he sees himself as a very fine fellow—so fine as he can never be... In a dream...' (213頁)

夢を見続けながら一生を過ごすことができれば、幸福なのかもしれない。しかし、人間は意識があるからこそ苦痛があるのだという考えがコンラッドの他の作品で繰り返されるごとく、シュタインも同様の考えを述べる。「いつも目を閉じている訳にはいかないので、本当に困ったことになる。……夢を実現させることができないのに気づくのは愉快なことではない、それほど強くもなければ、それほど利口でもないという理由で。」(213頁)

すなわち、常に夢の中で自己偽まを続ける訳にはいかず、夢は実現しない、と彼は言う。しかし、シュタインは、夢を見て、それを追いかけて続けることは、否定されるべきことでも愚かしいことでもないと言う。彼の見方からすれば、人間はいわば夢の海に生まれ落ちる。その比喩の海には「破壊的要素」もあるが、それに「身を任せて、手足を動かすことによって」しか浮かぶことはできない。ロマンチックな人間が夢を追いつけることは、「とてもよくない」ことであり、「とてもよいことでもある」という。そして、いかに生きるかと問われれば、夢を永遠に追いつけることのみだろうと言う。

ジムがバトサンに移ってからの『ロード・ジム』の後半部を解釈するには、その舞台が既に述べたような人間観の持ち主であるシュタインによって紹介された場であることをおさえておく必要がある。『ロード・ジム』がプロットの点からは、いわば前半部と後半部に分かれた、そのまともにやや難点のある作品であることは、多くの批評家によって言及された。しかし、ダグラス・ヒューイット (D. Hewitt) が言うように、後半部は「単に附加されたものではない。むしろ二つの部分は……内部では結びついている」前半部だけで、コンラッドによる「満足な話として想像するのはむずかしい」<sup>9</sup>という見解が妥当であろう。

## V

ジュタインに相談して約二年半後に、所用を兼ねてパトサンを訪れたマーローにとって、一番印象に残ったのは、ジムの生き方にある謎の要素である。滞在を終えて別れる際、速度を増して離れて行くスクーター船上に立つマーローには、浜辺に立つジムは次のように見えた。「私には、海岸と海の静寂の中の白い姿は、限りなく大きな謎の核心に立っているように見えた。」(336頁)パトサンで適応して順調に暮し、久しぶりに親しく話もしたジムから、なぜ、この謎のような印象をうけるのだろうか。この問いは、マーローがパトサンで目撃したジムの成功と、それにもかかわらず拭えないジムにまといつく孤独と関連する。

ジムにとってパトサンは、いまわしいパटना号事件の記憶が追ってこない、「彼の想像力が働きかけるまったく新しい一連の諸条件」の場と思えた。この新しい場において、ジムは短時日で、人々の信頼とジュエルの愛を得る。彼が少年時代に好んだ冒険物語の夢は、少し形を変えて実現した。マーローは、ジムがパトサンの村の上に月が昇るのを指しながら、成功について語る際に「誇りの響き」を感じ、まるで月や星の動きをも支配しているかのような様子に微笑する。

ジムはまた、「家々をご覧下さい。私が信頼されていない家は一軒もありません」(246頁)と、高揚した気分で言う。ジムは、確かにこの地の人々の信頼を得た。この「信頼」という語は『ロード・ジム』のキー・ワードともいべき働きをしているので、この視点から小説の前半部と後半部の関係を考察してみたい。

ジムはパटना号の一等航海士としては、職業倫理にもとる行為により信頼を根底から裏切った。パトサンでは、ジムは一種の政治的、軍事的、行政的指導者として人々の信頼を得た。ジムにとって、信頼とは何よりも、果たすべき役割りと能力に結びついている。そして、『ロード・ジム』全体は、他

の人々と自己との関係を、広い意味で仕事を遂行する能力の観点からのみとらえがちなジムの深い孤独を浮き彫りにする。

マーローの立場から見れば、ジムがこの世界の果てのような地で信頼を得たのは、彼の能力や努力もさることながら、何よりも現地の村人にとっては不可解な要素のある余所者であったからである。ジムがヨーロッパの近代文明の中で育った人間として身につけた武器を扱う能力と、戦いの際に重い大砲を小山の上に引き上げた力学的知識が、それらについて無知な人々の間で、彼を超自然的能力を持った存在であるかのような立場におく。したがって、マーローにはジムが得た多大な信頼は、結局は「やみくもの信頼」だとは思えない。

ジムにとって、自分が他の人に必要とされ信頼されることは格別の意味を持っていて、それは男女の愛という、もっとも自然な感情の発露とみなされる領域にも浸透している。ジムはジュエルとの愛について、次のように言う。「毎日、自分の存在が他の人に必要な——いいですか、絶対に必要だと知る、いや知らされると、自分の行動にも違った見方をするようになります。」(304頁)

マーローは、恋愛についてこのようなとらえ方をするジムの、「彼には自分に起こる全てのことに、特別な意味を見出す才能を持っていた」と感じざるをえない。そして、このように人々から「信頼」され「必要」とされているジムの孤独な立場を痛感する。

ブラウンの登場によって、ジムのパトサンでの立場と、その地で築き上げたと思っていた平和な秩序は崩壊する。この過程で浮かび上がるのは老ドラミンとその妻が息子のデイン・ワリスを危険な立場に置かぬよう、終始配慮した点である。このため、ジムが事態の前面に出て対処して、かえって皮肉な結果に終わる。土着の共同体の一員であり、肉親の情に守られるデイン・ワリスに比して、ジムはその業績と貢献にもかかわらず、「完全な孤独」、「全くの徹底的な孤独」に包まれた余所者であった。



この対比は、コンラッドの人間観において仕事の意義とはどのような位置を占めるかという問題の考察に導く。ジムの他の人々との関係のとらえ方は、仕事の遂行能力とそれに対する評価や信頼の観点に強く傾斜している。しかし、デイン・ワリスとジムの対比は、人間が心の底で求めているのは、実は無条件で自分を受け入れてくれる故郷や人々ではないかと示唆する。故郷を離れて放浪者となることについて、マローは次のように言っている。「悲しいかな落後者よ。我々は団結している限りにおいて存在する。彼（ジム）は、ある意味ではぐれてしまった。がんばりとうさなかった。ただ彼はそのことを、人を感動させる程に激しく意識していた。」(223頁)

パटना号事件によって、ジムには暖かくむかえてくれる炉辺も優しい自然もない。彼は故郷に帰らぬ決心をしているが、その背後には、デイン・ワリスの場合とは全く違う親子関係がある。ジムの父はイングランドの静かで平穏な田舎で四十年間、信仰と美徳についてのささやかな考えを繰り返して説教した。ジムの父には、この世でなすべき行動と唯一のふさわしい死に方は明確で、誘惑に陥らないよう固く決意をすれば、いずこにても正しい生き方が貰えるはずであった。

マローが後で知ったことだが、ジムが最後まで保管していた父からの手紙には、この真面目で善良な牧師が成人になった息子に与える「やさしい教訓」がしばしば含まれていた。しかし、ジムには非常に多くのことが起こったのに対して、彼の父の説教を長年聴き続けた会衆は次のような人たちであった。「その人たちには何も起こらなかった。彼らは不意を襲われることはなかったろうし、運命と格闘しなければならぬようなことはなかったろう。」(342頁)

温和な初老の田舎牧師であるジムの父には、一種の狭量さがぬぐいがたくある。ジムに「人々を激しく、あるいは早まって判断」してはいけないと書くこの父は、パटना号事件後は、ジムへの音信を絶ってしまう。プロテスタントの田舎牧師であるこの父の冷たさと、カトリックの田舎司祭を連想させ

るフランス人中尉がジムの行為に非常に厳しい見方を下すことを考えあわせると、そこにはひとつの意味があるといえよう。

故郷に帰れないジムは、パトサンを過去とは隔絶した場と見なして懸命な努力により、いわば見事な社会復帰をする。しかし、成功のただ中であっても、罪と恥の意識を伴う過去の記憶が消え去るわけではないことは、パトサンを訪問したマーローがジムと別れる直前の場面などで明かである。成功の頂点であった頃の描写でさえ、マーローの感性がとらえた暗さ(dusk, gloom)と沈黙(silence)が頻出する。ジムにたいする暗殺未遂の逸話や、コルネリウスの絶えざる敵意と妬みもまた、ジムの「成功」が脆く、やがて崩壊することを予感させる。

この脆さと崩壊の予感は、ジムの主観が「成功」に対して現実中存在するマイナス要因を過小評価し、自分の業績を想像力によって潤色しているのを否定しがたいからである。そして、そのような想像力の働きは、またしてもジムの深い孤独を想起させる。なぜなら、ジムはこのパトサンの地で骨を埋める覚悟でいるが、彼と周囲の人々との間には共通の価値観や絆は無く連帯は存在しない。

ジムは少年時代より、一段と高い立場から人々を見下し、指導者としての立場にたとうとする傾向があった。パトサンでは、この夢想していた立場につくこととなった。ジムに欠けていたのは、他の人々との横並びで連帯する姿勢である。死の近いブラウンが、「偉そうにしやがって、ちえっ」と言い、「あいつは中身の無いにせものだ」(344頁)と評したのは、意外なまでに的を突いている。ジムの強烈な指導者意識が、彼をこの地のリーダーにしたが、まさにその意識によって「ジムを支配者にした全てのものが、彼を囚われの身にもしていた」(247頁)とマーローは見ている。土地の者から見れば、指導者とはいえジムはどこまでも、いつかは外の世界に帰るはずの人間であった。また、コルネリウスから見れば、「あいつは馬鹿。小さな子供」(397頁)であり、これも一面を突いている。

ブラウンは蝶を連想させるイメージで、ジムを「汚れた大地に触れることなく動きまわるように羽を持った人間の一人であるかのよう」(383頁)に感じた。このジムにとって、共通の血、経験、罪をほのめかし、「対等の者」であることを主張するブラウンの出現は衝撃であった。ジムが、それ以前に対等の立場で他の人々との間に絆を持っていたら、衝撃はさほどでなかったろう。この衝撃より、ジムは誤った判断をしてしまう。

ジムをパトサンに送った時、マーローの考え方では、「いったん中に入ってしまうと、外の世界にとっては、あたかも彼は存在したことがなかったようになる」(232頁)はずであった。しかし、コンラッドの作品にあっては、人間は自らの過去に完全に決別はできない。ブラウンは、ジムが永久に捨てたはずの外の世界からの「使者」であった。ジムが自らの過去を記憶から締め出して忘れたふりをして生きるのに対して、紳士ブラウンは「自らの過去に対する奇妙な復讐に燃えた態度」をむきだしにし、「全人類に対する彼の意志が正しいという、やみくもの信念」(370頁)を持っている。この過去への態度の違いが、ジムを弱い立場に追いやる。ジムには、ブラウンのような人間の内にひそむ非合理的凶暴さがとらえきれず、そこから悲惨な結果が生じる。

自らの判断が悲劇的な結果を生み、パトサンの人々の信頼を一挙に失ったジムは、ドラミンのもとに行き射殺される。その死に方は、他殺ではあるが自殺同然である。この死を罪のつぐないとみる解釈もある。だが、罪というならば、何に対するどのような性質の罪かと考えてゆくと、ジムの最後の決意には、自分の罪を詫げる要素は確かにあるが、単純に罪の償いとは言いきれない。

タム・イタムより惨事の報告を受けて以降、小説の終わりまでジムの描写には微妙なものが多い。ジュエルが引き留めるにもかかわらず、自殺同然の死を選んだことは、「彼はあいまいな行為の理想との婚礼をあげるために、生きている女性から離れていった」(416頁)と描写されている。

「何ものも僕に触れることはできない」と「この上ないエゴイズム」をひらめかせながらジュエルに言ったジムは、倒れる寸前まで、左右の群衆に「誇り高い、ひるまない視線」を投げかけた。この姿は、自らの過去の非を全面的に悔い改めた人間のそれとは言えない。むしろ、人生を自分の意志どうりに決着をつけたい人間の姿である。ジムはブラウンとの対決により「人間は他の人々より格別に悪くなくとも、時々悪く振舞う」(394頁)と認識するまでになったが、ジムは決して自分を他の多くの人々と同列におくことなく、誇り高く、独自の人生を追い続けた。屈折した要素はあるが、ジムは夢を追い続けたわけで、「彼は不変であった」のだ。人生で二度目の大失敗をしたジムは、あらためて、「どこにも行く場所の無い」自分の立場を見出しただろう。それでもなお、夢を追い続けるならば、自分なりに死に近づくしかない。

ジムの死が、純粹な罪滅ぼしというよりは、エゴイズムの表れの面があることには、彼個人を超えた大きな理由がある。コンラッドの小説の常として、『ロード・ジム』においても、全ての登場人物にとっての神のような絶対的価値は無い。パトサンの人々とジムの間に共通の価値、目的に基づく連帯も無い。人々は、ジムが死ぬという事実は見届けるが、彼の意図については不可解で謎にとどまる。ジムの死は悲劇的に見えるが、それが古代ギリシャの英雄のように秩序の回復、平穏、豊穡をもたらさないことは Dorothy Van Ghent の指摘した点である。<sup>7</sup>

ジムの生き方には、どこまでも自己顕示性、自己中心性が抜けきらない。マーローが早い段階で、ジムより「鑄造したての金貨」のように純粹だが、「とんでもない混ざり物」がどこかにあるように感じた印象は、このおぞましさに関係する。にもかかわらず、ジムは他のどの登場人物よりも倫理的問題を読者に提起する。また、当初は行為のレベルではジムを厳しく判断していたマーローに繰り返し同情、共感をひきおこす。

では、何故、マーローはジムに深い関心を持ったのか。見たところ、英国

商船隊の伝統のもとに育ち、甲板をまかせても大丈夫な好青年であるジムがバトナ号事件の被告であるとは、マーローにとっては衝撃的で「深い恐怖」を覚えた。マーローは自らのジムに対する関心を「いささかの弁解」を求めているのかと分析する。ジムはマーローの「あらゆる側面」に訴え掛け、「我々の一人」と感じさせる。マーローは自ら信じてきた伝統を信じ続けた。このために、マーローはジムが「罪」よりも「恥辱」を気にしすぎると感じ、ブライアリーと同様に地下の深い所にも隠れてしまえばよいと時には思いつつ、ジムに「機会」を与え続けた。

だが、ジムはマーローにとって最後迄、不可解な存在であった。『ロード・ジム』という小説全体もまた、何かを説明しきったものでなく、ある特定の生き方、価値観を決定的に肯定したり、否定しているわけではない。全編をささえているものは、想像力と記憶の影響力に揺り動かされることの免れがたい人間の存在についてである。

明日への夢を抱くことは、自己偽まん、自己顕示等の愚かしさと結びつきやすい。マーローは、久し振りに訪れたシュタインの館で思いがけなくも不幸なジュエルに会う。「夢に駆り立てられて」去っていったジムについて、残された彼女がその無情さを非難する言葉を聞きながら、マーローは次のように思う。

And yet is not mankind itself, pushing on its blind way, driven by a dream of its greatness and its power upon the dark paths of excessive cruelty and of excessive devotion? And what is the pursuit of truth, after all? (349—150頁)

マーローは、人間存在そのもの、文明のありようそのものの中に、夢が抜き難くあるととらえている。結局、シュタインの言ったように、ロマンティックな夢を追い続けることは「とても悪い、とても悪い」ことで「とてもよいことでもある」のだろう。このようなマーローに対して、夢を見る度合いが強く、失敗したり傷ついては、機会をとらえて再出発の夢を見るジムが、言

業ではとうてい充分に伝達できぬとの想いを一面では持ちつつも、少しでも理解してほしいと語りかけることによって『ロード・ジム』の相当の部分は成立している。その部分を包みこみながら、ジムの視点からは欠落しているものを補って、限りない人間存在の謎に触れつつ、マーローは話の聴き手の一人であった特権に恵まれた人物に、さらには読者に、言葉を統御しつつ、ひとつの物語を伝えたのだ。

## 注

- 1 Joseph Conrad, *Lord Jim* ("Collected Edition of the Works of Joseph Conrad"; London: J.M. Dent, 1957), p. 6. 以下、このテキストからの引用は、必要に応じて頁数のみを括弧内に示す。
- 2 Daniel R. Ross, "The Saving Illusion," *Conradianna* Vol. 20, No. 1 (1988), p. 47.
- 3 Jacques Berthoud, *Joseph Conrad: The Major Phase*, (Cambridge: Cambridge University Press, 1978), p. 71.
- 4 *A Concordance to Conrad's Lord Jim*, ed. James W. Parins, Robert J. Dilligan and Todd K. Bender (New York & London, Garland, 1976) によれば、fancy は20回使用されている。ちなみに、fancied は5回、fanciful は3回。これにたいして、dream とそれに類する語は40回、imagination とそれに類する語は約60回使われている。
- 5 John Batchelor, *Lord Jim*, ("Unwin Critical library," London: Unwin, 1988), p. 104.
- 6 Douglass Hewitt, *Conrad: A Reassessment*, (London: Bowes & Bowes, 1969), p. 31.
- 7 Dorothy Van Ghent, *The English Novel: Form and Function*, (New York: Rinehart, c1953), pp. 243-244.

1992. 6. 30 受理

**Synopsis****Future and Past**

—Imagination and Memory in *Lord Jim*—

Toshimasa Oshimoto

As long as every individual lives on this earth, he or she has tomorrow and yesterday. Tomorrow broadens into future in front, while yesterday changes into past behind. Almost all individuals have dreams or hopes about their future, though to what extent consciously they do so may be different among them. And when they look back at their past, they often feel keenly the discrepancy between their dreams or hopes and what they have actually done. This discrepancy comes from the fact that each individual has to face the reality of life every day in which there are some elements that haven't been considered enough before.

*Lord Jim* deals with this discrepancy. Jim, the protagonist, has strong tendency to dream about his future. When he was a boy, he read holiday light literature and dreamed of being a heroic officer of the British Merchant Navy on the sea in future. In this boyish daydream, he imagines himself to be an exemplary officer who does his duties devotedly. But, it cannot be denied that his dream is 'narcissistic'.

This narcissistic quality remains with him throughout the rest of his life. It is one of his defects. Yet, it is closely connected with his virtues, too. For example, because of this narcissistic dream, Jim makes great efforts to master professional knowledge and skills, and gets a certificate of the first mate in his early twenties. The contradictory, double functions of Jim's narcissistic dream make *Lord Jim* an interesting, attractive novel. At the same time, they do not allow readers to judge

it simply.

The merits and defects of an imaginative person are interestingly shown through Marlow's delicate, narrative comparisons between Jim and various, minor characters such as Big Brierly, Chester, Little Bob Stanton and the French lieutenant. Through these comparisons it is suggested that Marlow feels sympathy towards Jim. But it is also true that Marlow sometimes finds Jim to be repulsive because of his self-centredness based on his intense imagination. Thus Marlow's attitude to Jim is ambivalent, and this continues to be so throughout the novel.

When Marlow meets Shtein to get advice on how to deal with Jim, the prosperous merchant and entomologist gives his diagnosis that the young man is "romantic". Shtein believes that not only Jim but also human beings in general are romantic. Shtein's idea of "romanticism" is closely connected with imagination, which is the essential attribute of human existence from which no one can escape completely. Shtein judges romanticism ambivalently—it is "very bad" and "very good, too".

With Shtein's aid, Marlow sends Jim off to Patusan, a remote place which seems to be cut off completely from the outer world. In the latter part of the novel, Jim seems very different from himself in the earlier part. He has become a heroic leader here, and the Patna affair seems to have been forgotten completely. When Marlow visits Patusan two years later, Jim says to him with pride that he is trusted by all the village people. Marlow admires Jim, but at the same time he finds his young friend rather enigmatic and lonely.

This impression Marlow has about Jim comes from the fact that the native people's trust in him is based merely upon his ability, and Jim himself tends to regard his relation with others only in terms of ability to do practical work. Jim can be a heroic leader in Patusan as long as everything goes smoothly. He makes great efforts to be a leader. But Marlow realizes that all Jim's efforts stem from his egoistic desire to regard himself as better than others. To Marlow, it sometimes seems that civilization itself is built upon human beings' dreams.



Gentleman Brown's invasive appearance at Patusan reveals that there is no tie of solidarity between Jim and other people in the small village except the functional relation. Once the people stop trusting Jim as protective guardian, he finds himself amid distrust and loneliness. All his efforts to make and keep Patusan an ordered community have been ruined by his misjudgement of the situation and Brown's treacherous outburst of pent-up ill-will.

In the final part of the novel, Jim goes to Doramin and is shot to death by the old chief whose son has been killed by Gentleman Brown and his group. Jim seems as if he has committed suicide. This scene is interpreted by some critics as Jim's atonement for his great mistake.

There is some tragic elements in the scene. Yet, it is different from the final parts of such a tragedy as *Oedipus*. Jim's suicidal death does not bring peace and harmony again to the community, as in typical tragedies.

His final act comes from his desire to design his life according to his wish to live heroically. By this act he divorces himself from the repeated humiliating memory that has disturbed his present existence.

Thus, Lord Jim is a novel which shows how imagination and memory pervade human existence through delicate, intriguing narrative.